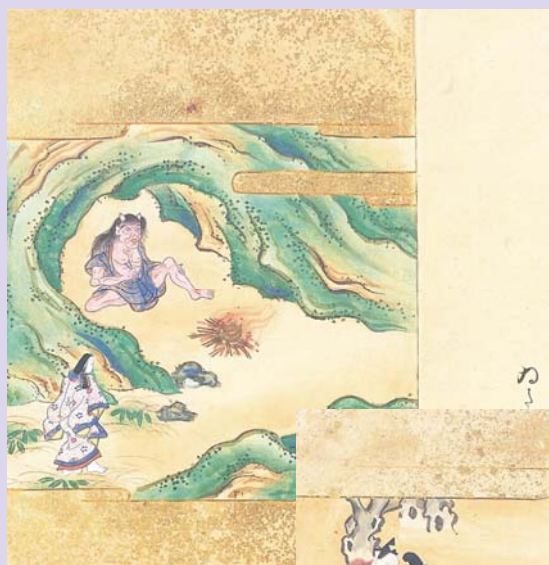


広島大学図書館所蔵の奈良絵本たち



あかことうりんとれんかんのわ
してあまのやうきあまのうりま



ついでにさしこむやうきあまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの
うりまのうりまのうりまの



はじめに

「お伽草子」の世界によろこそ。広島大学図書館の貴重書室には、室町時代から江戸時代初期にかけて作られた物草子 **お伽草子** の写本・版本が数多く所蔵されています。また、それらの中には、美しい挿絵をもつ **奈良絵本** が含まれており、とりわけ、『すゝめの夕かほ』『花世姫』『よしのふ』等は、広島大学図書館蔵本が現在知られる唯一の奈良絵本です（『花世姫』には絵入り版本が数本ある）。

この展示目録では、現在インターネット上で公開されている奈良絵本について、各作品の内容や、広島大学図書館所蔵本の特徴を、代表的な挿絵とともにご紹介いたします。また、巻末には、特別に『すゝめの夕かほ』の翻字本文並びに口語訳を掲載いたしました。是非、作品全体を原文と口語訳を通して、味わってみてください。

それでは、ご一緒に、お伽草子の世界へ……

目次

伊勢物語……………1

すゝめの夕かほ……………2

硯わり……………3

住吉物語……………4

たはら藤太……………5

中将姫……………6

つるのしうけん……………7

はちかつき……………8

花世姫……………9

ふんせう……………10

やしまのさうし……………11

横笛草紙……………12

よしのふ……………13

頼豪阿闍梨絵卷……………14

いく嶋……………15

〔翻刻・口語訳〕
広島大学図書館蔵『すゝめの夕かほ』……………16

『伊勢物語』



【内容】

在原業平に擬せられる主人公の一代記で、「をとこの初冠にはじまって、その生の終焉までが描かれる。『源氏物語』をはじめ後代の物語に与えた影響は計り知れない。また、例えば、一二三段を踏まえて藤原俊成が、「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」と詠じた如く、和歌の世界への影響も大きい。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・下、二冊。箱入り。下冊には錯簡が確認される。題簽は墨書。本文は普通本系統。挿絵は上下冊それぞれに二十四面、計四十八面みえる。

『すゝめの夕かほ』



【内容】

『宇治拾遺物語』卷三の十六「雀報恩事」を、そっくり取って、奈良絵本に作ったもの。文章も、『宇治拾遺物語』の話に近い。前後二段の構成で、前段が善因善果の話、後段が悪因悪果の話という対照をなしている。それに慈悲の徳を説いた教訓、及び姥一族繁栄の祝儀的結末が付加されている。このような腰折れ雀の話は、日本各地に伝承されている有名な昔話で、また類話は中国やモンゴル、韓国などアジアの各地にも広く分布している。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。一冊。大形本。帙入り。料紙は鳥の子紙で袋綴。表紙は紺地に、金泥にて水辺草花模様を描いたもので、見返しは布目の金紙。挿絵は七丁分（見開一、片面五）。広島大学図書館蔵本と高安六郎旧蔵本の二本が知られていたが、高安六郎旧蔵本は戦災により焼失。当該本は現存する唯一の伝本である。



【内容】

遁世譚、高僧伝。青侍として仕えていた大納言家の紹介に始まり、硯わり事件を経て、一家が仏道を志していく経緯を語る。

『すずりわり』の伝本は、大きく三系統に分類される。A系統は内閣文庫本・名古屋大学小林文庫本・実践女子大学本。B系統は加藤家蔵奈良絵本。C系統が、広島大学図書館蔵本とパリ国立図書館蔵奈良絵本であり、三系統の外に細見実蔵の古絵巻一巻がある。

各系統の本文には異が多い。中でもC系統の広島大学本・パリ国立図書館本は独自色が強く、主人公の名も、A系統とB系統が書写山の「性空」とするのに対し、C系統は摂津多田郷の「しんかい」とする。侍従の君を初瀬観音の申し子として重視する点、比叡山との繋がりが強調される点など、他系統と著しい相違がある。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・中・下、三冊。料紙は間合紙。表紙は、紺地に金泥の草花模様を描き、金砂子を散らしたものであるが、大部分は剥落し、地の紙が露出している。題簽は丹紙短冊形。上巻題簽は破れあり、「硯」一字を欠く。奥書はなく、書写者・書写年代は不明である。



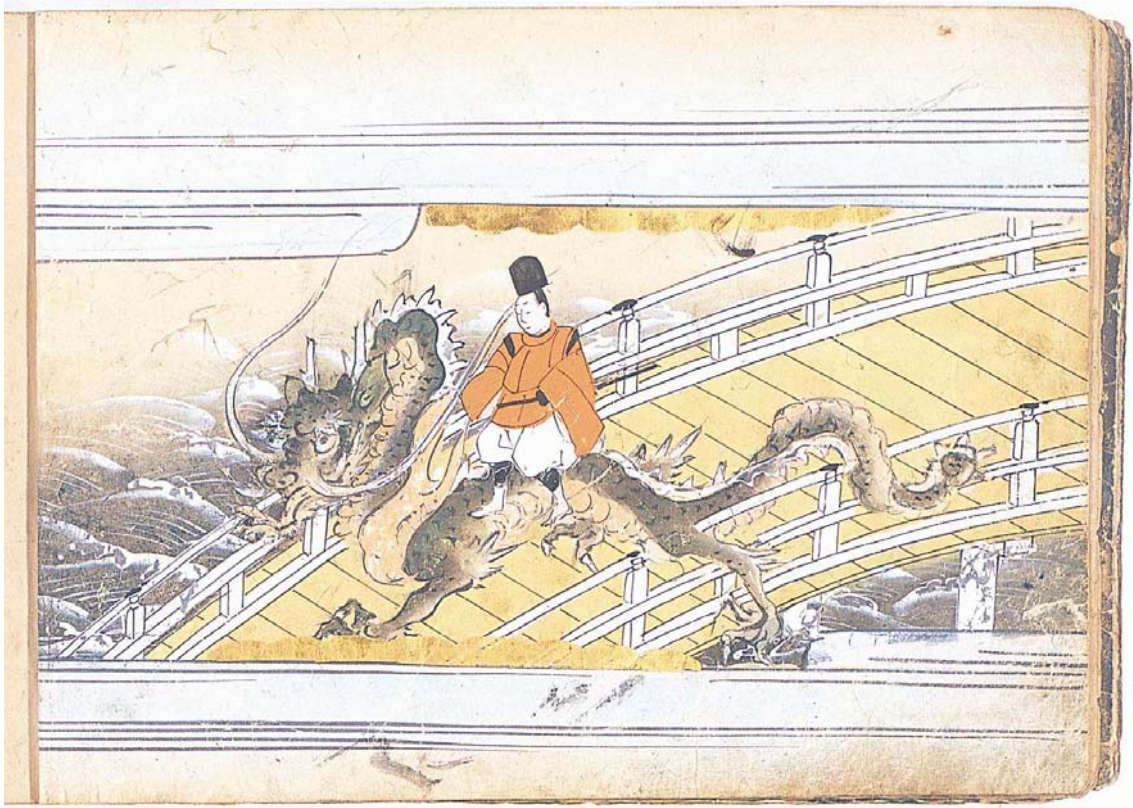
【内容】

継子物語。四位少将は姫君に求婚するが、継母が策を弄して妨害する。姫君は亡母の乳母が尼となつて隠棲する住吉へ逃れ、姫君を忘れることのできない少将は初瀬に参詣して夢想を得、住吉で姫君と再会。二人は都へ戻つて幸福な結婚生活を送る。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・中・下、三冊。題簽は墨書。本文は十行古活字本系であるが、一部白峰寺本系と同文。また、非流布本系の本文箇所もある。挿絵が上・中・下冊それぞれ五丁分（片面）確認できる。

『たはら藤太』

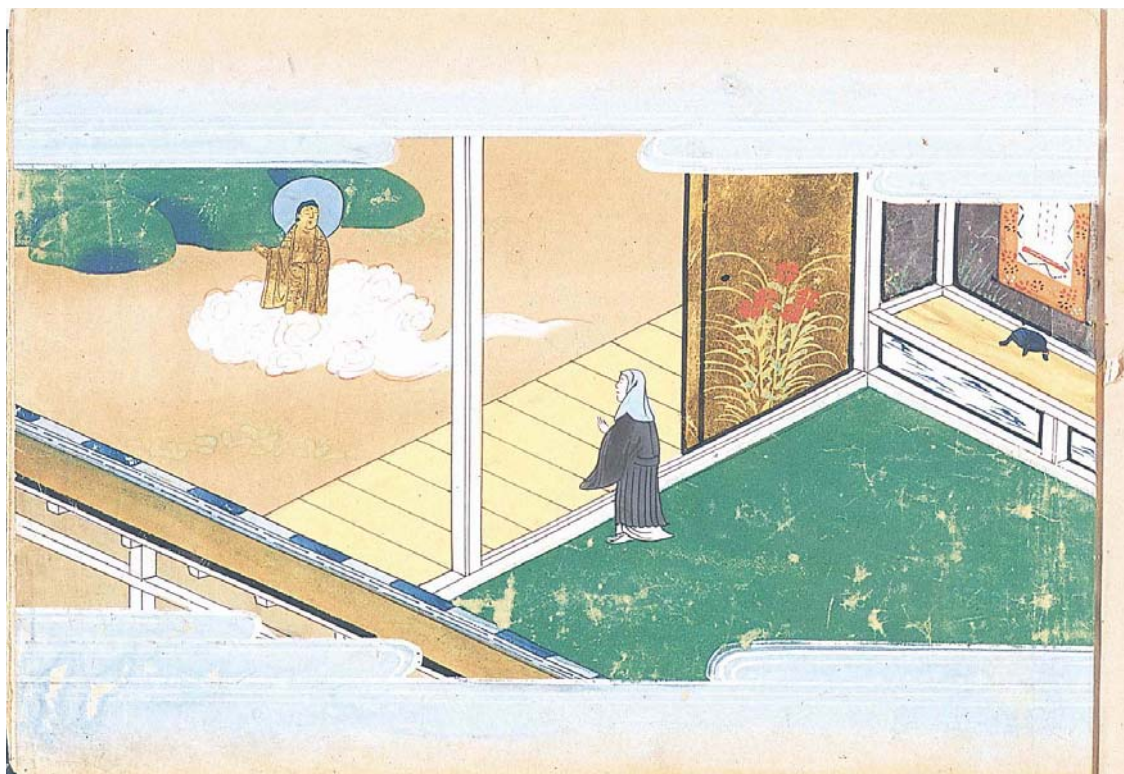


【内容】

武家物の一種。俵藤太秀郷のムカデ退治に始まり、平将門の乱鎮圧後の一門繁栄までを描く。諸本は絵巻の形で伝わる古本系統と、絵入り刊本・絵巻・絵入り写本等の形で伝わる流布本系統とに大別される。流布本系統は、古本系を増補改作して俵藤太を主人公とする物語としての体裁を整えたもので、その増補改作にあたっては特に三井寺に関して詳述している点が注目される。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・中・下、三冊。帙入り。奥書はなし。挿し絵は、上冊六面、中冊四面、下冊四面の、計十四面。本文は、流布本系統に属する。



【内容】

当麻寺に存する曼荼羅の縁起に伴う中将姫の説話。右大臣豊成の娘中将姫は、継母の讒言で殺害されようとするが、家来によって庵に隠され養育される。その後都に帰った中将姫は出家して禅尼と名乗り、阿弥陀如来の来迎のうち極樂往生をとげる。

当麻曼荼羅に姫が関わり、極樂往生をしたという話は『建久御巡礼記』（建久3（1192）年成立）以来、複数の記録・説話集に見られる。そこに姫の発心を語る継子いじめ譚が導入され、中将姫の一代記として当該本のような物語が成立した。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。二冊。帙入り。諸本は写本の形で伝わるものと、慶安4年に出された絵入り版本とが見られる。当該本と同じく写本二冊で伝わるものに国会図書館蔵本、慶應義塾大学斯道文庫蔵本（下巻のみ存）などがある。

『つるのしうけん』



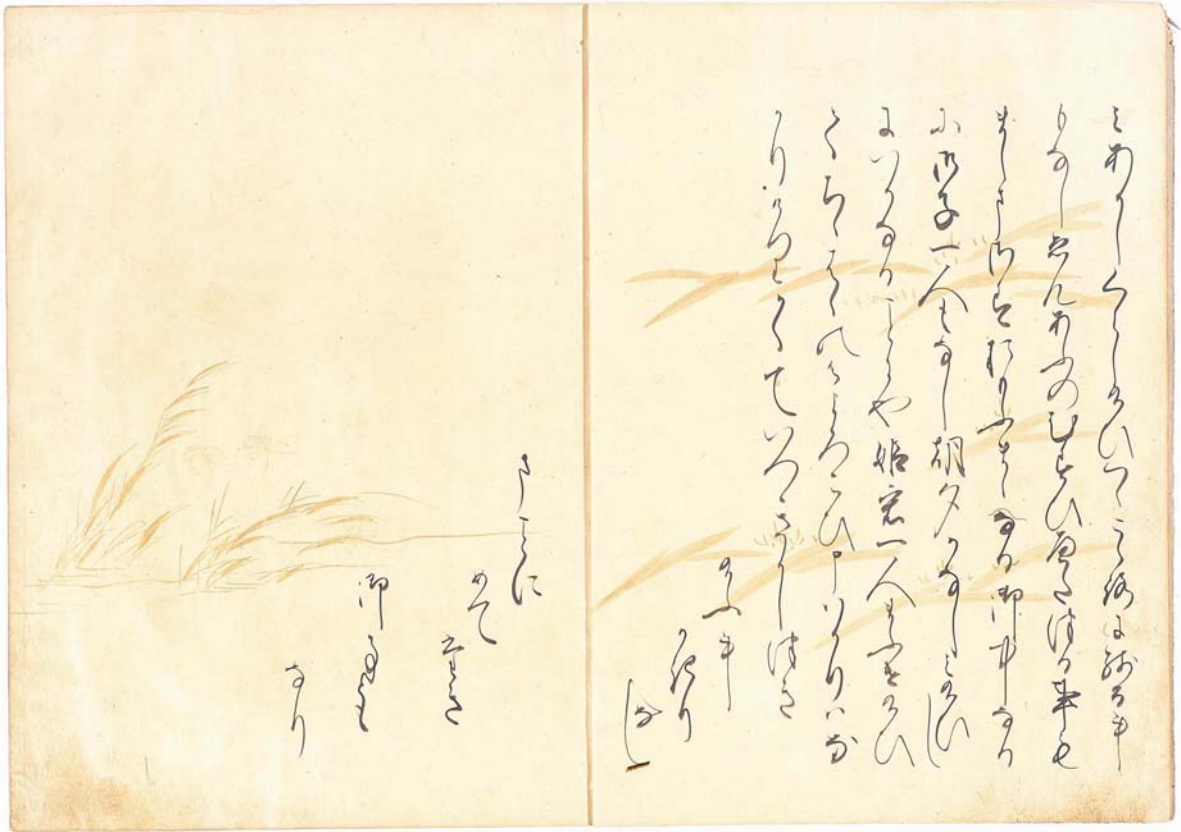
【内容】

異類婚姻譚。書名は『鶴の草子』が一般的である。宰相右兵衛督は、刀と交換に助けた鶴の化身と契りを結ぶ。守護宮崎の軍勢を撃退すると、女は正体を明かし、形見の短冊を交換して飛び去る。やがて女は三条内大臣の家に転生し、宰相と再会。宰相は左大臣となり、子孫は繁栄した。

伝本は、室町末期成立とされる一冊本系統と、江戸初期成立とされる三冊本系統の、二系統に分類される。一冊本系統は、市古貞次蔵奈良絵本とフリア美術館蔵巻。三冊本系統には、奈良絵本数点（天理図書館蔵・実践女子大学蔵など）、版本二種（寛文二年版・鱗形屋版）があり、三冊本系統の本文が主に流布したことが分かる。二つの系統は内容が大きく異なるが、昔話『龍宮女房』をもとに作られ、その雰囲気を残す一冊本が先に存在し、三冊本はそれを読み物として改作したものであるとされる。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・中・下、三冊。箱入。料紙は、金泥で草花模様を描いた鳥の子紙。表紙は紺地に金糸からくさ模様の布張り。三冊本系統の一つ。



【内容】

備中守実高の妻は、死際にその姫の頭に鉢を被せる。継母に捨てられた姫は、宰相に求婚され、脱げた鉢から宝物が出てきて宰相の妻となる。のちに姫は、出家した実高と長谷寺で再会する。数あるお伽草子の中で、もつとも有名な話の一つ。申し子譚と継子譚、二つの話型を具備しており、類話も多い。伝本は、御巫（みかんなぎ）本系統と、流布本系統とに大別される。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・中・下、三冊、箱入。料紙は、金泥で諸処に秋草等を描いた鳥の子紙を使用。表紙は、灰色がかつた地の紙が露出しており、素朴な雰囲気であるが、薄い茶褐色の布片が多数付着しており、元来は布地張りであったことを窺わせる。奥書はなく、書写者・書写年代は不明。流布本系統の本文をもつ。書写段階では挿絵も計画されながら、叶わなかったらしく、数丁ごとに、空白の面が残されたままになっている。

『花世姫』



【内容】

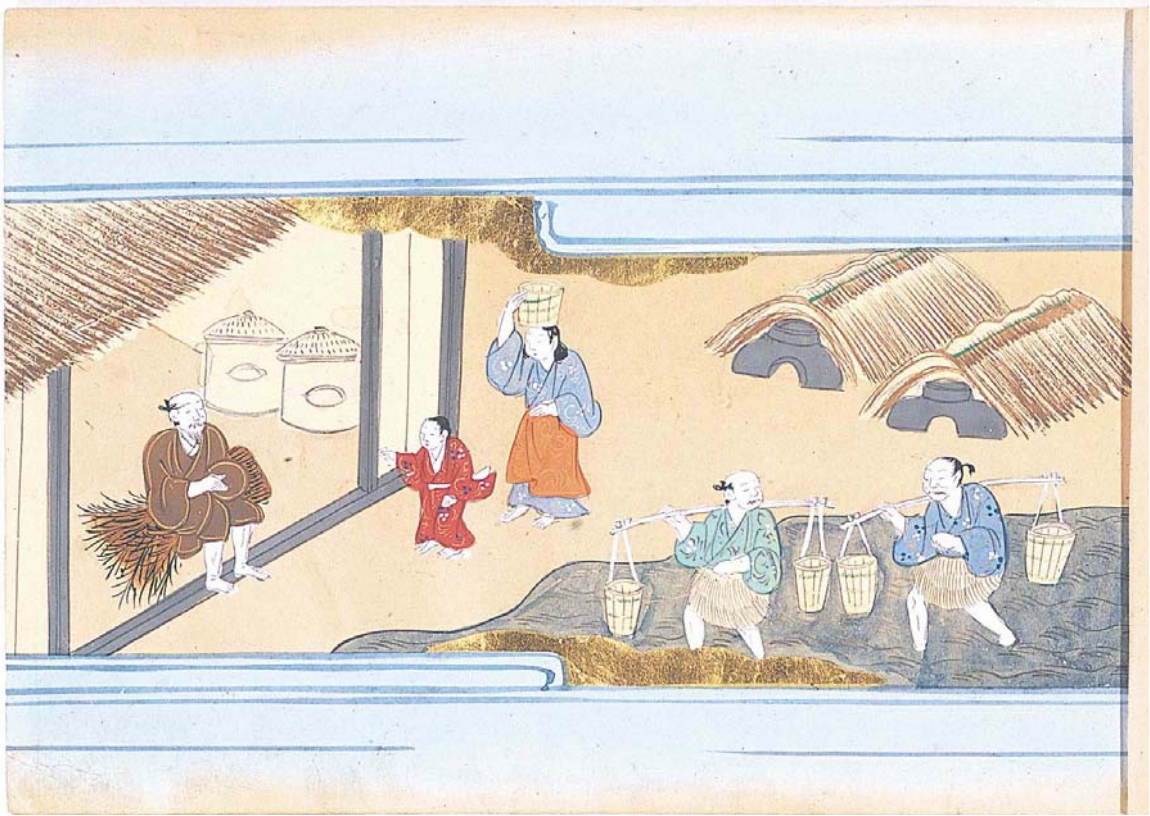
継子物語。継母に疎まれて山に捨てられた花世姫が、山姥の助けを得て中納言の三男宰相と結ばれ、一族が繁栄する物語。

全国的に分布する昔話の姥皮型と呼ばれる継子譚を素材にしてなったものである。『鉢かづき』『うばかは』に較べて全体に詞章の潤色が多く、分量が増えている。姫君が身をやつして火焚きになる趣向は、継子譚の定型で、女性と寵神信仰の関わりや、欧米のシンデレラ物語が想起されることが既に指摘されている。

主な伝本は無刊記絵入版本三冊（赤木文庫旧蔵）と奈良絵本二冊（広島大学蔵本・写本）がある。赤木文庫蔵本と同版の本は天理図書館、東洋文庫、東北大学付属図書館にある。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。二冊。半紙本。料紙は鳥の子紙で、金泥で草花模様が描かれている。表紙は、鶯色の布地に水色と金色で、花と唐草の模様を織り出している。外題題簽は「花世姫上」「花世姫下」と墨書。内題は「はな世の姫上」「はな世の姫中」「花よの姫下」。内題と装丁から、元は上中下三巻であったものを二冊に改装したものと指摘されている。挿絵は、上冊十一面、下冊九面の計二十面。広島大学図書館蔵本は現存する唯一の写本である。



【内容】

立身出世譚。塩屋で成功した正直者の文太は鹿島大明神に参詣して子宝を授かる。成長した姉妹は才色兼備の美女と評判になり、関白の御子二位中将に求婚されて一家は末永く繁栄した。

物語末尾に「まつくめてたき事のはしめには、此さうしを御覽しあるへく候。」とあるように、正月など、めでたい席で読まれる本であった。立身出世した文正、玉の輿に乗った姉妹にあやかろうとしたものと思われる。

伝本は非常に多く、十余系統に分かれる。その伝本の多さは、いかにこの物語が広く読まれていたかを物語る。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・中・下、三冊。丹緑本（近世初頭、墨刷りの絵入り版本の挿絵に、出版時に丹緑黄の筆彩色を施したもの）の本文を写し、奈良絵本として仕立てたものと見られる。同じく丹緑本系統の奈良絵本としては天理図書館蔵本（題簽「弾上物語」）などがある。



【内容】

山伏姿で平泉に下向する判官一行が、信夫の里で宿を借りる。応対の尼は義経の従者、佐藤継信（次信）と忠信の母親であった。弁慶が、義経の身代わりで射られた継信とその仇を討った忠信の最期を語り、義経が身分を明かした。母は歓喜して二人の形見を受け取った。

「八島」は、室町期の語り物芸能であった幸若舞曲の台本を読み物に転用したいわゆる「舞の本」に入っている。「舞の本」は寛永頃に絵入り版本として出版され、広く流布した。その中でも「八島」は新刻本も出されるほどの人気作であった。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。一冊。物語途中から始まっているため、本来は二冊本であったと思われる。現存部分は「舞の本」のひとつである「八島」の後半部分に酷似しており、同一の物語と考えられる。

当該本は、おそらく版本を書写し、奈良絵本に仕立てたものと考えられる。物語後半、弁慶が継信・忠信兄弟の最期について語る部分のみが現存する。なお、謡曲にも同内容を扱った「八島」がある。



【内容】

建礼門院の女房横笛と斉藤瀧口時頼は恋仲になるが、瀧口は別れを教訓されて隠遁する。夢告により居場所を訪ねた横笛に瀧口は会おうとせず、二人は門の内外で歌を贈答する。その後横笛は大井川で入水し、それを知った瀧口は横笛の菩提を弔うべく高野山に上り、一層の修行に励んだ。

武士を中心に描いた作品である、いわゆる武家物の一種として分類される場合と、恋愛物・出家遁世譚として分類される場合とがある。もとは『平家物語』の挿話の一つであるが、そこから横笛に焦点を当て、独自の物語を形成している。

諸本は古写本の系統2種と、刊本の系統とに分かれる。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。卷子一軸。箱入り。もとは冊子本であったものを卷子本に改装したものである。ただし改装に際し、二紙欠落、また第五紙と第六紙とが貼り違えられている。欠落箇所は、系譜的内容と横笛の出自を語る冒頭部分の一紙、第四紙のあとで乳母から瀧口の想いを知らされた横笛が返歌をしたためるくだりの一紙と推定されている。本文は、古写本の系統のうち、慶應義塾大学本と同系統に属する。



【内容】

武家の御家騒動物。宇多天皇の御代、越前・加賀両国の将監であったよしのぶの死後、弟の源太二郎直家が国の乗っ取りを謀るが、よしのぶの忠臣よりかたの活躍で源太は討たれ、よしのぶの一家は末永く栄えた。こうした復讐物は、『神道集』所載「児持山縁起」などにはじまり、ひとつのグループをなすが（「まんじゆの前」・「ともなが」・「村松の物語」ほか）、その多くが古浄瑠璃と深い関わりを持つ。本作品も、古浄瑠璃の筋立てや詞章をもとに、子ども身代わり（「あじろの草子」・「をときり」ほか）、鋸引きでの斬首（「堀江物語」・「村松の物語」ほか）などの趣向を加えたものであるとされ、古浄瑠璃の正本のごときを草子化して成立したものとみられる。

【広島大学図書館蔵本について】

写本。上・中・下、三冊。挿絵十六枚を含む。表紙は紺地に金泥で秋草が描かれ、その中央に丹紙短冊形の題簽を付す。奥書はなく、書写者・書写年次など詳細は不明であるが、江戸初期、寛永〜寛文頃の写しとみられる。欠丁が原因と思われる物語の不連続が数カ所あるほか、錯簡もあり、中巻の24丁から26丁は、挿絵をはさんで前後が入れ替わっている。本作品は他に伝本がなく、広島大学蔵本のみが残る。

『頼豪阿闍梨絵巻』



【内容】

書名は、『山王靈驗記』が一般的。日吉山王の利生靈驗説話を集めたもの。叡山第二十六代座主院源、暹賀・聖教兄弟、大僧正良真、桓舜僧都や、それに関わる山王靈驗が記されている。

【広島大学図書館蔵本について】

卷子本。一卷。組紐付き。箱入り。表紙は、藍色、唐草模様の絹の布表紙。料紙は、楮交じり斐紙。奥書は無く、書写者・書写年次ともに不明。内題、外題共に無く、登録書名は、箱に二箇所「頼豪阿闍梨絵巻」と墨書されているのに依る。『国書総目録』も、「頼豪阿闍梨絵巻らしいごうあじやりえまき 一軸 絵巻 広島大」として掲出するが、穎川美術館本（一卷・重要文化財）『山王靈驗記』とほぼ同内容である。

穎川美術館本については、住吉如慶（1599～1670）の手による模本の存在が知られており（現在東京国立博物館所蔵）、当該本についても、穎川美術館本の模本である可能性が高い。なお、各段末尾には、本文に相応する絵が都合五箇所みえる。



【内容】

人間としての神の前世を説く、いわゆる本地物の一種。これは厳島神社の神々の本地を題材としており、『厳島の本地』とも称する。天竺・西城国の王女・足引宮と、彼女と関わりを持った人々が、天竺での苦難・転変を乗り越えて日本に到来、やがて厳島で神として垂迹する、という物語。作品の成立に関わって、同じく本地物の一種である『熊野の本地』との似通いが指摘されている。諸本はA・B二系統に大別され、A系統は梅沢記念館蔵絵巻と明暦二年版本。対して、江戸時代に広く読まれたのはB系統の本文を有する諸本である。

【広島大学図書館蔵本について】

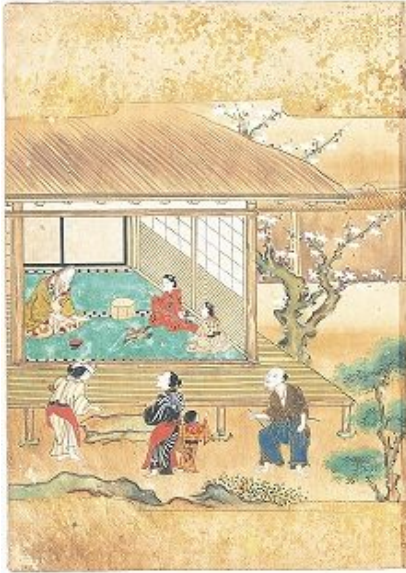
卷子一軸の残欠本。箱入り。料紙は、金泥及び青色で山水花鳥模様の下絵を描いた鳥の子紙を使い、縦32センチメートル、横49センチメートルを継いで卷子としている。表紙は、藍色地に金泥で水辺草を描いている。奥書はなく、書写者・書写年次は判然としないが、筆跡その他の状況から、近世初期のものと思われる。

上巻は全部佚し、下巻の一部、「せんさいわう」が山中で王子に出会う場面からあとの部分が残っている。B系統の諸本のうち、続群書類従本に最も近い。

〔翻刻・口語訳〕

広島大学図書館蔵

『すゝめの夕かほ』



いまはむかし、春つかた日うららかなるに、六十あまりなる女のありけるか、まこともをあひしてゐたりけるに、にはにすゝめのとひきたり、つい
はみけるをみて、わらんへともいしをとりてうちたれば、すゝめのあしにあたりて、まるひ、ふためき、まどふを、此女心うくおもふに、からすのちかくとひかけりければ、あなかなしや、とら
れなんとおもひて、いそきとりあけ(1オ)いきしかけ、いたはり、よるはおこけにおさめ、ひるはひさにすえて物くわせ、くすりをなめさせなとするを、子とも、まことも、あはれとしおひて、すゝめをかひ給ふよとて、

いまはむかし、春つかた日うららかなるに、六十あまりなる女のありけるか、まこともをあひしてゐたりけるに、にはにすゝめのとひきたり、つい
はみけるをみて、わらんへともいしをとりてうちたれば、すゝめのあしにあたりて、まるひ、ふためき、まどふを、此女心うくおもふに、からすのちかくとひかけりければ、あなかなしや、とら
れなんとおもひて、いそきとりあけ(1オ)いきしかけ、いたはり、よるはおこけにおさめ、ひるはひさにすえて物くわせ、くすりをなめさせなとするを、子とも、まことも、あはれとしおひて、すゝめをかひ給ふよとて、

【本文】

いまはむかし、春つかた日うららかなるに、六十あまりなる女のありけるか、まこともをあひしてゐたりけるに、にはにすゝめのとひきたり、つい
はみけるをみて、わらんへともいしをとりてうちたれば、すゝめのあしにあたりて、まるひ、ふためき、まどふを、此女心うくおもふに、からすのちかくとひかけりければ、あなかなしや、とら
れなんとおもひて、いそきとりあけ(1オ)いきしかけ、いたはり、よるはおこけにおさめ、ひるはひさにすえて物くわせ、くすりをなめさせなとするを、子とも、まことも、あはれとしおひて、すゝめをかひ給ふよとて、

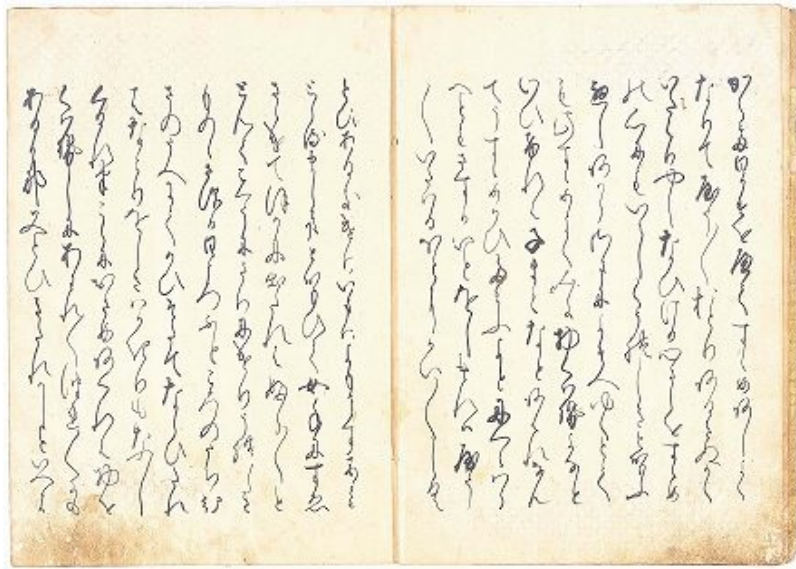
にくみ

わらへり。(1ウ)

〔挿絵 第一図〕(2オ)

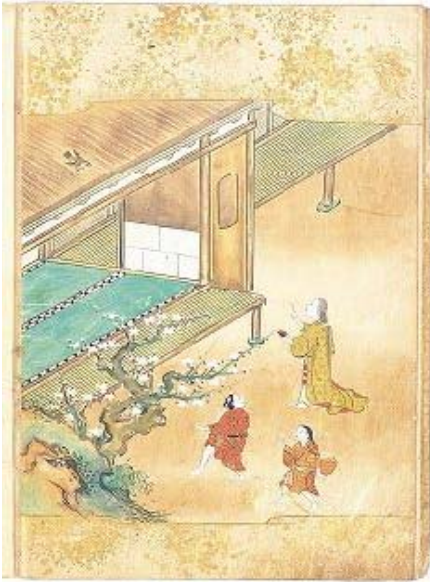
【口語訳】

今となつてはもう昔のこと、春頃天気穏やかで、
齢六十をすぎた女がいたが、孫たちと遊んでいたところ、(目の前の)庭に雀が飛んできた。(雀が餌を)くちばしでつついていたの見て、子供達が石を手にとつて(雀に)投げつけたので、雀の足に当たつて、(雀は)転んで、ばたばたと羽をばたつかせて、うろたえるのを、この女は可哀想に思っている
と、カラスがその近くを飛び交っていたので、「あ
あ可哀想に、(このままではあの雀はカラスに)獲られてしまう」と思つて、急いで(雀を)拾い上げて、(1オ)
息を吹きかけ、手当をして、(それから)夜は
麻小筒おこけに(雀を)入れて、昼は膝に(雀を)置いて
食べ物を与えて、薬を舐めさせたりするのを、(女
の)子供や、孫達は、「可哀想に(お婆さんは)年
をとつては、雀を飼いなさるよ」といつて、冷やかに
して、笑つた。(1ウ)



かくて日かすをへて、すゝめあしよく
なりて、やう／＼おとりあるきぬ、かく
いたはり、やしなひける心さしを、すゝめ
の心にもいみしくうれしきとおもふ
へし。あからさまによそへゆくとして
も、此すゝめよくみよ、物くはせよ、など
いひければ、子、まこなど、あはれ、なん
てうすゝめかひたまふよとにくみわら
へとも、さすかいとをしければ、やう
くいたはるほとに、かい／＼しく(2ウ)
とひあるきけり。いまはよもからすにも
とらるましきとおもひて、女手にすゝ
さゝけて、ほかに出たれば、ふらく／＼と
とんとて、こくうにさりにけり。うれしき
ものゝ、さすか日ころふところのうち、ひ
さのうへにてかひそたて、ならひたれ
は、なこりをしさはかきりもなし。
くるればこゝにおさめ、あくれば物を
くはせしに、あわれ／＼、つれ／＼にも
あるかな。又、とひきたれかしといへは、
(3オ)

このようにして日がたち、雀の足は良くなって、18
次第に跳ね上がり歩いた。このように(雀を)介抱
して、餌をやつて育てた(女の)愛情を、雀の心に
も大変ありがたいと思つたことである。 (女が)
ほんの少しでも外出するといつても、「この雀をよ
く見ておいておくれ。餌を食べさせておくれ」等と
言つたので、(女の)子供や、孫達は、「ああ…ど
うして雀なんかを飼はれているのだらうか」と冷や
かし笑うが、(女は)そうは言つてもやはり(雀が)
可愛いかつたので、徐々に(雀の)治療をする内に、
(雀は)しつかりと(2ウ)
飛びはね歩くようになった。「今はまさかカラスに
も獲られたりはすまい」と思つて、女は手の平に(雀
を)のせ高く持ち上げて、外へ出たところ、(雀は)
ふらふらと飛んで、大空に去つていった。(女は)
嬉しい気持ちではあつたが、そうは言つてもやはり
数日の間胸の中、膝の上で(餌を)与え養ひ育てて、
(雀と一緒に)馴れっこになつていたので、名
残惜しさは尽きることがない。「日が暮ればここ
(麻小笥)に入れて、日が明ければ餌を食べさせて
いたのに、なんとまあ、心が満たされないことであ
ることよ。再び、飛んで来いよ」と言つたところ、
(3オ)



くつろくくつろくひあつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく
くつろくくつろくくつろくくつろく

くつろく
くつろく
くつろく
くつろく
くつろく
くつろく
くつろく
くつろく
くつろく
くつろく

人々きいてわらひあへり。さて、廿日は

かりありて、のきはにすゝめのいた

くなくこゑのしければ、女きゝつけて

ありしすゝめのこゑにもにたるかな、

もし日ころのなこりをしたふてきた

るにやとおもふて、たちいてみれば、

かのすゝめなり。やさしや、なんちは

われをわすれもせずしてきたるか

とて、うちまもりあたるに、すゝめ

うれしけにをとりまはりて、くちの(3ウ)

うちより

露はかりの

ものを

おとして、

又とひ

さりけり。(4才)

〔挿絵 第二図〕 (4ウ)

人々は(女の言葉を)聞いて冷やかして笑った。さ

て、二十日程過ぎて、軒端で雀がしきりに鳴く声が

したので、女は(その声に)気付いて「あの雀の鳴

き声に似ていることよ、もしかして私に飼われてい

た頃の名残惜しさを恋い慕って来たのではないか」

とあって、家の外に出て行ってみたところ、あの雀

であった。「なんと情のあることか。お前は私を忘

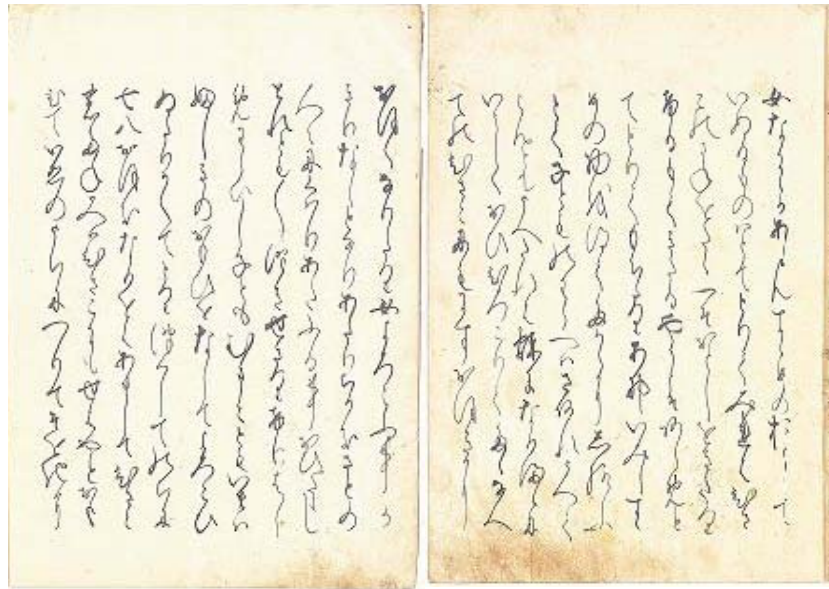
れることなく(こうして再び私の所へ)やって来た

のか。」とあって、(雀を)見やっていると、雀は

嬉しそうに飛びはねくるくる回って、口の(3ウ)

中から露ほどの大きさの物を(地面に)落として再

び飛び去っていった。(4才)



女、なにゝかあらん、すゝめのおとして
いぬるものはとて、とりてみれば、ひさ
このたねをたゝ一そおとしをきたり
ける、もてきたる、やうこそあらめと
て、とりてもちたり。あないみし、すゝ
めの物を得て、たからにし給ふ
とて、子どものわらへは、さあれ、うへて
みんとて、うへたれば秋になるまゝに、
いみしくおひひろこりて、たゝなへ
てのひさこにもにす、おほきに(5才)
おほくなりたり。女、よろこぶ事か
きりなし。となり、あたりちかきさとの
人々にくはりあたふる事おひたゝし、
とれともく、つきせさりけり。はし
め、わらいし子ども、むまことも、いまは
ふしきのおもひをなして、よろこひ
あたり。かくて、とりつくしてのちに、
七八おほきなるをはあまして、ひさこ
のたね、又はひさこにもせはやとおも
ひて、いゑのうちにつりてそをきに(5ウ)

女は、「何だろわか、雀が落として行ったものは」
と言って、手にとつて見たところ、瓢の実をたつた
一つのみ落とし置いたのを、「(わざわざ私の為に)
持って来たのには、理由があるう」と言つて、(実
を)拾つて持つていた。「おやまあ、あきれたこと、
雀(が落としていった)物を手にして、(自分の)
宝物にしなさつていろよ」と言つて、子供が笑うが、
「それでは、(実を)植えてみよう」と言つて、植
えたところ秋になる頃には、大変大きく成長して、
ただ普通の瓢にも似ず、大きく(5才)
たくさんの(実が)成つた。女は、この上なく喜ん
だ。隣や、近隣の里の人々に配り与える事大変な数
である、(瓢を)採つても採つても、無くなること
はなかつた。最初、笑つていた子供や、孫達は、今
となつては思いがけない目にあつて、喜んでいた。
このようにして、(瓢を)取り尽くした後に、「七
つ八つ(格別に)大きなのを残して、瓢の種、或い
はひょうたんにもしたい」と思つて、
家の中で吊つておい(5ウ)た。



けの月ころも過ぬれば、いまはよくなり
ぬらんとおもひて、とりおろしてみれば、
ひさこよりおほきにおもかりけり。あや
しみ、くちをあけ、みれば、しろきものゝ
いたりたり。何にかあらんとて、うちうつし
てみれば、白米にてそありける。おもひ
かけす、ふしきにおもひ、おほきなるうつ
わものに入つし入てみるに、米のつき
する事さらになかりけり。かすくの
ものに入つしたれども、ひさこのうちには、
もとのことくにみちくたり。これは
たゝ事にあらし、すゝめのとくをほう
して、かくのことくにするにこそと、あ
さましく、うれしくて、物によくく
したゝめをき、さて、のこりのひさこをも
とりおろしつゝみれば、おなしやう
に米みちてそ侍りける。(6ウ)

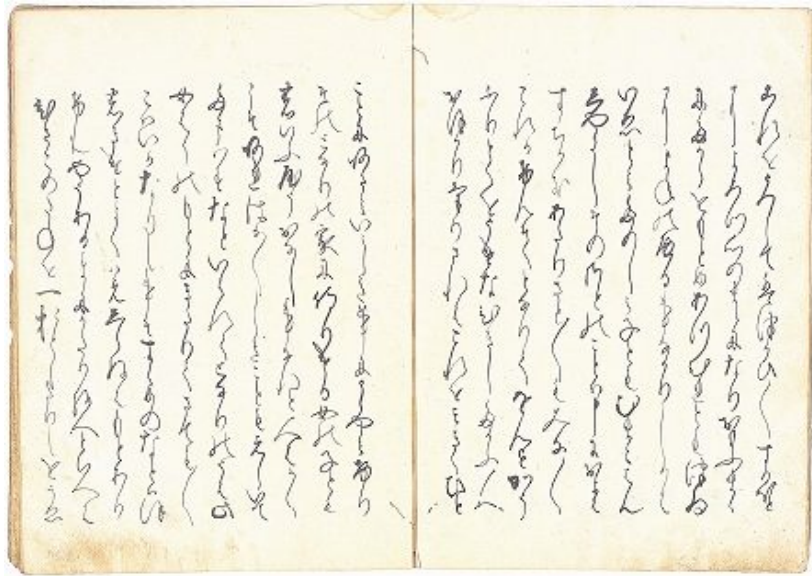
もとのことくにみちくたり。これは
たゝ事にあらし、すゝめのとくをほう
して、かくのことくにするにこそと、あ
さましく、うれしくて、物によくく
したゝめをき、さて、のこりのひさこをも
とりおろしつゝみれば、おなしやう
に米みちてそ侍りける。(6ウ)

ける。月ころも過ぬれば、いまはよくなり
ぬらんとおもひて、とりおろしてみれば、
ひさこよりおほきにおもかりけり。あや
しみ、くちをあけ、みれば、しろきものゝ
いたりたり。何にかあらんとて、うちうつし
てみれば、白米にてそありける。おもひ
かけす、ふしきにおもひ、おほきなるうつ
わものに入つし入てみるに、米のつき
する事さらになかりけり。かすくの
ものに入つしたれども、ひさこのうちには、
もとのことくにみちくたり。これは
たゝ事にあらし、すゝめのとくをほう
して、かくのことくにするにこそと、あ
さましく、うれしくて、物によくく
したゝめをき、さて、のこりのひさこをも
とりおろしつゝみれば、おなしやう
に米みちてそ侍りける。(6ウ)

〔挿絵 第三図〕 (7才)

数ヶ月程過ぎたので、「今はよい具合になつてい
ることであろうよ」と思つて、取り降ろしてみた
ころ、(通常の)ひょうたんよりはるかに重かつた。
(女は)不審に思い、(ひょうたんの)口を開けて、
中を見たところ、白い物が入っていた。「何である
うか」と言つて、(他の入れ物に)ちよつと移して
みたところ、白米であつた。思いもよらず、不思議
に思つて、大きな器に(ひょうたんの中身を)移し
入れたところ、(出てくる)米が尽きることは全く
なかつた。色々な入れ物に(米を)移してみたが、
ひょうたんの中には、(6オ)

(お米が)もとのように満々とあつた。これは尋常
ではない、雀の恵みを受けて、このように(私は)
しているのだと、驚き、嬉しくて、(ひょうたんを)
入れ物に嚴重にしまつて置いて、さて、残りのひよ
うたんまでも取り降ろしては取り降ろしてはしては
して見ると、同様に米で一杯でございました。(6
ウ)



これをうつしては、つかひくするほと
に、よろつ心のまゝになり、おもふまゝ
にたからをもとめ、あつむれとも、つゐ
によねのへる事なかりしかは、

いゑとみ、たのしみ、子ども、むまこ、はん
しやうし、そのさとのことは申におよは

す、ちかきあたり、さとくも、みなく、
これかけんそくとなりて、をんをかう
ふり、とくをうけ、なひきしたかふ人

おほかりけり。されは、これをみきくひと(7ウ)
ことにあさみ、いみしき事にうらやみけり。

そのとなりの家に侍りける女の子とも
のいふやう、おなし事なれと、人はかく

こそあれ、はかくしきこともえしいて
たまはず、などいはれて、となりのうは、此

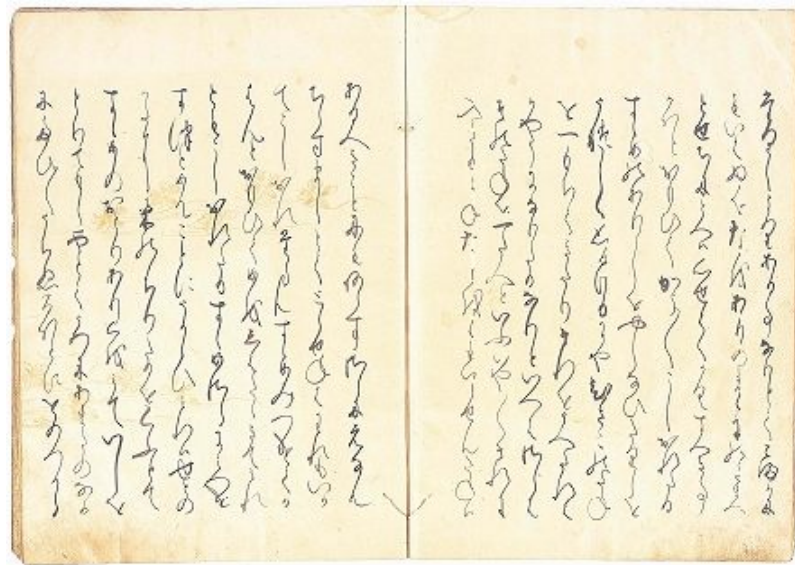
女はうのもとにきたりて、さてもく
こはいかなりし事そ、すゝめのなどはほ
のきけと、よくはえしらねは、もとあり

けんやう、あるまゝにかたり給へといへは、
ひさこのたねを一口おしたりしをうゑ(8オ)

(ひょうたんの中の) 米を移しては、(いろんな事
に) つかつてはつかつてはする内に、全て(女の)
思い通りになつて、欲しいままに財宝を買い求め、

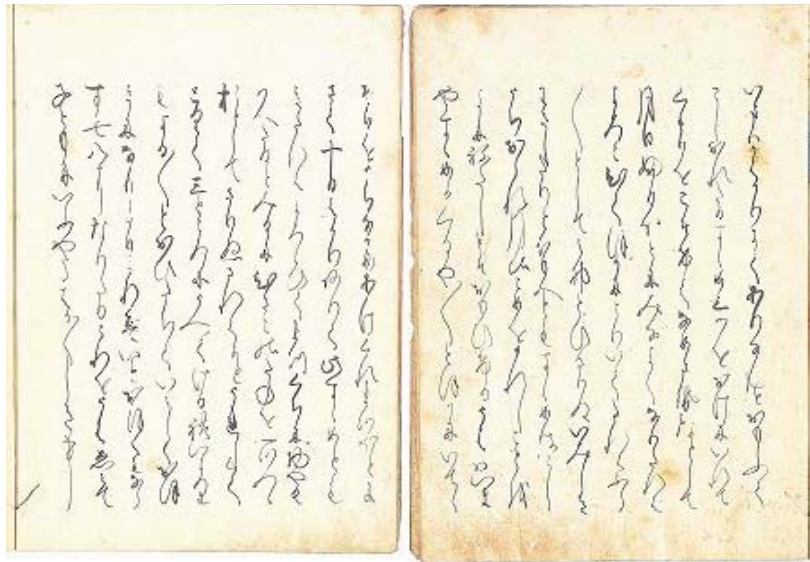
(家に) 買い集めたが、最後まで(ひょうたんの)
米が減る事はなかつたので、家には財産が増え、富
裕になり、(女の) 子供や、孫は、榮えて、(女の
住む) 里は言うまでもなく、(その里の) 近隣の、
里々も、あまねく、(女の) 配下のような者となつ
て、恵みを受け、富を受け、(女に) 付き従う人は
多かつた。しかれば、この事を聞き知つた人は(7
ウ)

非常にびっくりして、大変な事と羨んだ。その(女
の) 隣の家に住んでいた女の子が言うには、「同
じ(年寄り)なのに、お隣はあのようなことよ、(う
ちのは) 頼みがいがあることもお出来にならない」、
等と(憎まれ口を) 言われて、隣に住んでいる老女
は、この女のところにやつて来て、「なんとまあこ
れは一体どういう事か、雀がどうのこうのとは少し
耳に入つてはいるが、詳しい事情は知り得ないので、
事の初めから、あるがままにお話し下さい」と言つ
たので、(かの女は) 「瓢の種を(雀が) 一つ落と
したのを植え(8オ)



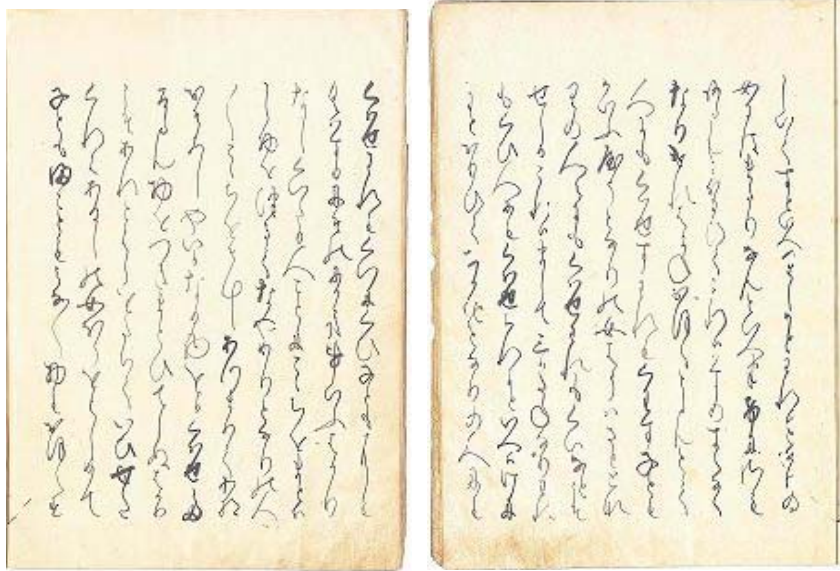
たりしより、ある事なりとて、こまかに
もいはぬを、なをありのまゝにのたまへ
と、せちにとへは、心せはかくすへき事
かはとおもひて、かうくこしおれたる
すゝめのありしを、やしなひたりしを
うれしく思ひけるにや、ひさこのたね
をもちてきたり、それをうへたれば、
かやうになりたるなりといへは、さらは、
そのたねを一たへといふ。いやく、それに
入たるよねなどはまいらせん。たねは(8ウ)
あるへきことにもあらず、さらにえなん
ちらすましととらせねは、われもいか
てこしおれたらんすゝめみつけてか
はんとおもひて、めをしはたゝきてみれ
とも、こしおれたるすゝめ、さらにみつけ
す。つとめてことにかゝひみれば、せとの
かたに、米のちりたるをくふとて、
すゝめのおとりありくをみて、いしを
とりて、もしやとてうつに、あまたのなか
に、たひくうちぬるほどに、をのつから(9オ)

てから、このような事になった」と言つて、つぶさ
には語らなかつたのを、「やはり(起こつた事を)
ありのままにおつしやつてください」と、熱心に頼
むので、「器量小さく隠しだてする事であろうか(い
やそのような事はない)」と思つて、「実はこのよ
うに腰の折れた雀がいたのを、介抱したところ(雀
が)ありがたく思つたのであるうか、瓢の種を一つ
持つてきて、(私が)それを(地面に)植えたところ、
このようになったのです」と言つたところ、「そ
れなら、その種を一つ私にやつて下さいな」と言う。
(かの女は)「いやいや、ひょうたんに入っている
米なら差し上げましょう。種は(8ウ)
あげられません、決してよそに散らすわけにはいき
ません」といつて与えなかつたので、(隣の女は)
「私もなんとかして腰の折れたような雀を見つけて
飼つてやろう」と思つて、しきりにまばたきをしつ
つ探してみるが、腰の折れた雀は、全く見つかるこ
とが出来ない。早朝大変熱心に辺りを見回している
と、勝手口の方に、米の散らかつたのを食べようと、
雀が飛び跳ねているのを見て、(女は)石を手にと
つて、「ままよ」といつて(石を)投げつけたところ、
あまたの雀の輪の中に、何度も(石を)投げつ
けたので、自然と(9オ)



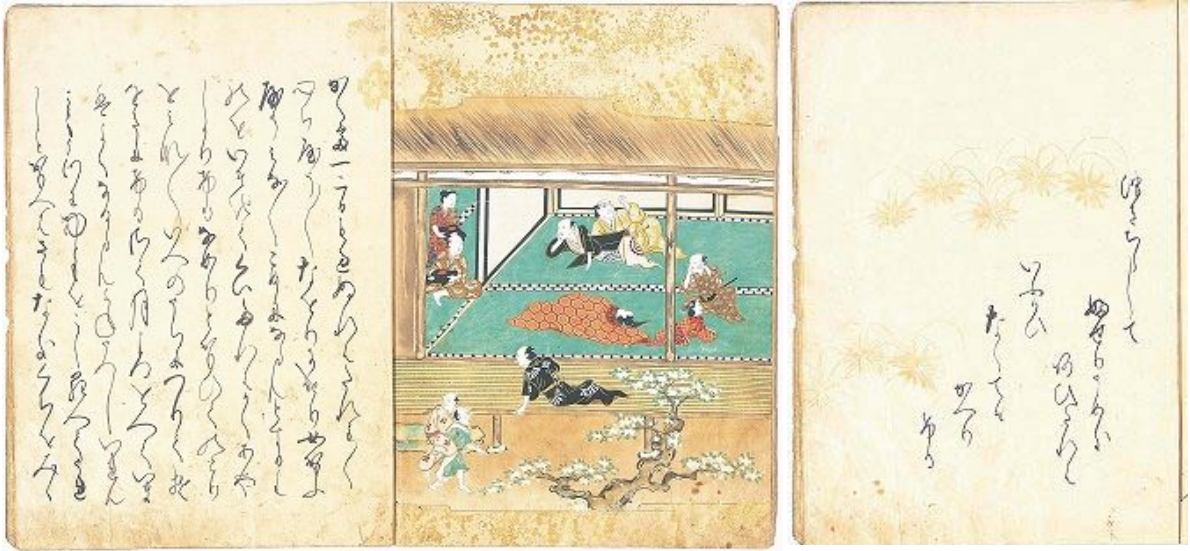
いまはかばかりにてありなんとおもふて、
こしおれたるすゝめ、三つをおけにいれて、
くすりをこそけて、なめさせなとして、
月日ふるほとに、みなよくなりたれば、
よろこひて、ほかにとりいてたれば、ふら
くとしてみなとひさりぬ。いみしき
わさしたりとおもへとも、すゝめはこし
うちおられ、月比、こめをかれしことを、
よにねたしとおもひける。うははいま
やすゝめかくるやくくと、ほかにいてゝ、(11オ)
そらをうちなかめ、あけくれまつほとに、
さて、十日はかりありて、此すゝめとも
きたれば、よろこひて、まつくちに物やく
はへたるとみるに、ひさこのたねを一つつゝ
おとしてさりぬ。されはよとうれしくて
とりて、三どころにうへてける。れいより
もするくとおひたちて、いみしくおほ
きになりたり。これはいとおほくもなら
ず、七八になりたる。これをうは多みて、
子どもにいふやう、はかくしき事(11ウ)

今のところこれぐらいでよからうと思つて、腰の折
れた雀、三羽を桶に入れて、(銅を)葉として削つ
て、くちばしにつけたりなどして、月日が経つ頃に、
三羽とも怪我がよくなったので、(女は)喜んで、
(桶から雀を)外に取り出したところ、(雀は)お
ぼつかない様子で三羽とも飛び去った。(女は)「す
ばらしいことをした」と思っているが、雀は腰を少
し折られて、数ヶ月このかた、(庭に畝として)米
を置かれたことを、大変憎らしいと思つていた。老
女は今にも雀がやって来るかやって来るかと、外に
出て(11オ)
空を見やつて、日がな一日待っている内に、さて、
十日程たつて、この雀たちがやって来たので、(女
は)喜んで、最初に「口に物をくわえているか」と
見たところ、瓢の種を一つづつ落として去つていっ
た。「思った通りだ」と喜んで(種を)取つて、(家
の庭の)三カ所に植えた。いつもよりすくすくと成
長して、大変大きくなった。(但し)実はそれほど
多くはならず、七つ八つほどだった。これを(みて)
老女は笑つて、(自分の)子供に言うことには、「た
いした事は(11ウ)



しいてすといへりしかと、われはとなりの女にはまさりなんといへは、けにさもあらんとおもひて、これは、かすのすくなくなりければ、よねおほくどらんとて、人にもくはせず、われもくわす。子どもかいふやう、となりの女はうは、さととなりの人々にもくはせ、われもくいなどこそせしか、これはまして三かたねなり、われもくひ、人にもくはせられよといへは、けにもとおもひて、ちかき、となりの人にも(12才)くはせ、われもくいにくひ、子どもにもくはするに、そのにかき事いふはかりなし。くいたる人ことに、こゝちをまとはし、物をつきてなやめり。となりの人くこゝちをそんし、あつまりて、あなおそろしや、いかなる物をかくはせたるらん、物をつきまとひてしぬはかりこそあれと、はらをたちていひせたくれは、あるしの女ほうをはしめて、子ども、まことも、みなく物もおほえず(12ウ)

出来はしなと言っていたが、私は隣の女に勝つていよう」と言つたところ、「本当にそうあつて欲しいものだ」と思つて、実は、数が少なかったので、米を多く収穫しようと思つて、他人にも食べさせず、自分も食べない。(女の)子供が言うには、「隣の女は、里や隣近所の人々にも食べさせて、自分も食べるなどしていた、ここになつてゐるのはまして三つの種である、自分も食べ、他人にも食べさせなされ」と言つたところ、「本当にその通りだ」と思つて、近所や、隣の人にも(12才)食べさせ、自分も食べるに食べて、子供にも食べさせるところ、その(味の)苦い事といつたら言ひようもない。食べた人は皆、気分を悪くして、嘔吐して、臥せってしまった。隣近所の人達は気分を悪くし、集まつて(言うことには)、「ああ恐ろしいことだ、(あの女は)どんな物を(私たちに)食べさせたのだろうか。吐き気がして(今にも)死にそうであることよ」と、腹を立てて(女の家に行つて)激しく言い立てたところ、主人である女をはじめ、(女の)子供、孫達も、皆茫然自失となつて(12ウ)



つきぢぢらして

ふせり、うめき

あひたれば、

いふかひ

なくてそ

かへり

ける。(13才)

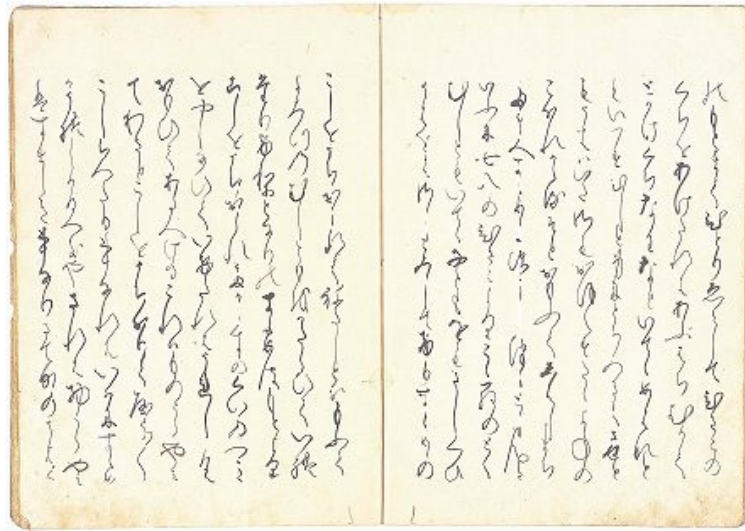
〔挿絵 第五図〕 (13ウ)

かくて一二日も過ぬれば、たれもく
心ちやうくなをりにけり。女おもふ
やう、みなくこめにならんとするも
のをいそきてくいたれば、かくあや
しかりけるなめりとおもひて、のこり
をみなくいへのうちにつりてそ
をきにける。さて月ころをへて、いま
はよくなるらん、よねうつしいれん
とて、うつわ物ともをこしらへて、うれ
しとおもへは、さみなきくちをみ。(14才)

吐き散らして、臥せつて、お互いに呻いていたので、
(隣近所の人達は) 言う甲斐なく帰っていった。

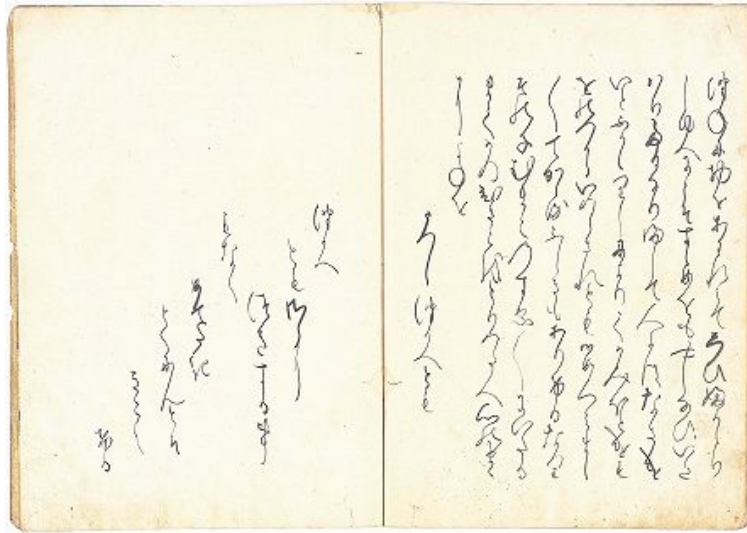
(13才)

このようにして一兩日も過ぎたので、誰も彼も気分
がようやく治った。女が思うに、皆が米になりかけ
のものを急いで食べたので、このように怪しいこと
になったのだらうと思つて、残り(の実)を全て家
の中に吊つておいた。さてしばらく経つて、「今は
よくなつたであらう、米を(他の器に)移し入れよ
う」と言つて、器物などを作つて、嬉しく思つたの
で、大きくもない口を耳(14才)



のもとまで、ひとりゑみして、ひさこの
くちをあけたれば、あぶ、はち、むかて、
とかけ、くちなわなといつゝ、めはなと
もいはす、ひしと身にとりつきて、させと
もうははいたさもおほえず。たよねの
こほれかゝるそとおもふて、しはしまち
たまへ、すゝめよ、すこしつゝとらんと
いふに、七八のひさこよりこゝらのとく
むしともいてゝ、子ともをもさしくひ、
うはをはさしころしてけり。すゝめの(14ウ)
こしをうちおられてねたしとおもふて、
よろつのむしともをかたらひていれ
たりけり。となりのすゝめは、もとより
こしをうちおられて、からすのくいぬへき
をやしなひていけたれば、うれしく
おもひてあたへける。これはものうらやみ
で、わざとこしをうちおりてやうく
こしらへたる事なれば、いかにすゝめ
かうれしかるへきや。されは物うらやみ
は、すましき事なり。さて、かのうはは(15オ)

元まで(広げて)、一人笑いをして、ひょうたんの
口を開けたところ、虻や、蜂や、ムカデや、トカゲ
や、蛇などが出てきて、目や鼻と言わず、しっかりと
と全身に取り付いて、刺すが女は(あまりの事に)
痛さを感じない。ただ「米がこぼれ降ってくるのだ」
と思つて、「しばらくお待ちなさい、雀よ、少しつ
づ(米を)取ろう」と言うのに、七つ八つのひょう
たんからたくさん毒虫たちが出て、子供をも刺し
て、女を刺し殺してしまった。雀が
(14ウ)
腰を打ち折られて憎いと思つて、全ての虫たちと結
託して入れたのであつた。隣の(女が飼つた)雀は、
最初から(子供に)腰を折られて、カラスの餌食に
なるはずだったのを介抱したので、(雀は)嬉しく
思つて(種を)与えた。死んだ女は(隣の女を)羨
んで、わざと(雀の)腰を折つてようやく仕向けた
事であるので、どうして雀が喜ぶであらうか(いや、
そんなはずはない)。そうであるので物を羨むこと
は、するべき事ではない。さて、あの女は(15オ)



つねに物をあわれみて、しひふかゝり
 しゆへにこそ、すゝめをもやしなひ、いた
 はりたるなり。まして人にはなさけ
 いとふかゝりしによりて、かみほとけも
 をのつからいのらされとも、御めくみまし
 くて、かゝるふしきもありけるなり。
 その子、むまこのすゑくにいたる
 まで、かのひさこをとりつたへ、心のまゝ
 によねを

うつしつかへとも、 (15ウ)

つかへ

とも、さびに

つきする事

もなく、

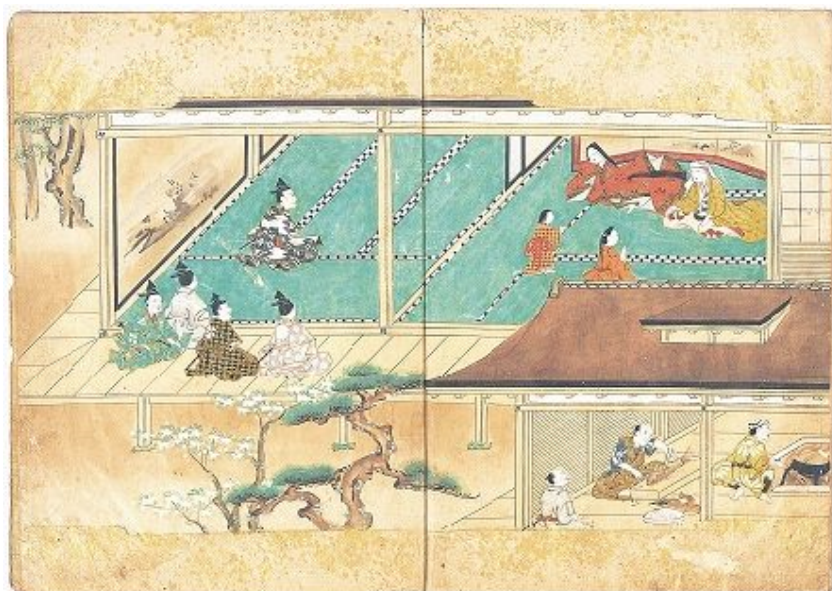
めてたき

とくにんとそ

きこえ

ける。 (16才)

常に物を哀れんで、慈悲深かつたからこそ、雀でも
 養つて、看護したのである。まして人間に対しては
 情けが大変深かつたので、神仏も(女自身が)神仏
 に祈らなくても、御恵をお与えになられて、このよ
 うな不思議な事もあつたのである。その子、孫の代
 まで、あのひょうたんを伝えて、思い通りに米を移
 しても、 (15ウ)
 使つても、全く無くなる事も無く、目出度い徳人と
 聞いたことよ。 (16才)



〔挿絵 第七図〕 (17才)

〔挿絵 第六図〕 (16才)

おわりに

いかがでしたか。

お伽草子の世界の魅力の一端をおわかりいただけましたでしょうか。

広島大学図書館は、今回ご紹介した奈良絵本以外にも、お伽草子の写本・版本を数多く収蔵しています。

また、展示目録には掲載しませんが、インターネット上では、各作品をより深く理解するための、参考文献が紹介されています。

(<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/de/kyodo/index.html>)

今回の講演会を通して、お伽草子の世界に興味を持たれた方は、是非インターネットをご利用いただき、お伽草子の世界により深く分け入ってみてください。広島大学図書館は、皆様に当館をより良くご利用いただけますよう、今後も様々な催しをいたします。ご来館を心よりお待ちしております。ありがとうございます。

「広島大学図書館所蔵の奈良絵本たち」

平成十七年六月三十日 印刷
平成十七年七月 一日 発行

編集者 広島大学図書館研究開発室
発行者 〒七三九・八五二二

東広島市鏡山一・二・二

広島大学図書館

082-424-6221

FAX TEL 082-424-6204

<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/>